

公開講演 「民族紛争と国家：北東アフリカにおける最近の動向」

演者 ジョン・マルカキス（クレタ大学）

司会 小田 英郎（慶應義塾大学）

司会 ご紹介をいただきました慶応大学の小田でございます。

本日のマルカキス教授のご講演の司会を務めさせていただきます。

いわゆる東西冷戦の終結以後、アフリカの状況を見ますと、政治的には民主化、そして経済的には自由化といったものがなにか軸になって、アフリカの情勢が動いているように見えます。こういう状況を見まして、論者たちの中には、「1990年代というのはアフリカの第2の解放の時代だ」というふうに言う人たちも多いわけでありませう。

そういう見方からしますと、なにかアフリカの将来は非常に明るいというふうな印象を持つてありますけれども、その一方で、アフリカでは各地で民族紛争が起こっております。今日ご講演いただく北東アフリカ地域は、そうした民族紛争が最も激しく戦われている地域であります。

ですから、「明の面と暗の面」といってはいいい過ぎかもしれませんが、アフリカ情勢というのはなかなか一筋縄ではいかないということでございます。

ジョン・マルカキス教授はこの「アフリカの角」地域の政治、経済、歴史の世界的な権威でいらっしゃいますけれども、マルカキス教授に、北東アフリカでは一体今何が起きているか、もちろん民族紛争なんですけれども、それは一体なぜ

起きているのか、その将来は一体どうなりそうなのかというようなことについてお話をいただければ幸いです。

私も、今日を迎える前にご報告の要旨を送っていただきまして、読ませていただきましたけれども、大変興味深い内容でありまして、ただ単に北東アフリカの将来はどうなるかということだけではなくて、さらにその先のアフリカにおける新しい国家モデルとは一体何だろうかというところにまで踏み込んだお話をさせていただけるようであります。大変楽しみにしております。

なお、マルカキス教授は、先ほど河合会長のご紹介にもありましたけれども、ギリシャのクレタ大学の教授でいらっしゃいます。先ほどご本人に「ご専門は何ですか」とうかがいましたら、「政治学である」と。それから、もちろん現代史もやっています。そして、前はもっと広いアフリカ地域を研究していたんだけど、最近特に「アフリカの角」地域に焦点を絞って研究を続けているということでございます。

マルカキス教授は、この国立民族学博物館に外来研究員として8月の初めにおいでになりまして、3ヵ月ご滞在だということでございます。

それでは、マルカキス先生、ひとつよろしくお願いたします。（拍手）

マルカキス ご紹介どうもありがとうございます。
た。

実は、アフリカの研究者でアフリカのこの北東地域に関心を持っている方が、日本にはたくさんおられることを嬉しく思いました。そして、これらの研究が大変優れているということに感銘を覚えています。

しかし、残念なのは、こういう研究というのはなかなか海外では知られていない。ひとつには日本語で書かれているという問題と、また十分に普及されていないという点があると思います。

そういう意味で、今回できました日本ナイル・エチオピア学会の協力を得まして、日本のこのようなアフリカを研究している皆さんの研究成果というものを、世界各地の研究者と共有できるようにしていただきたいと思います。

さて今日は、日本ナイル・エチオピア学会のご招待を受け、とくに福井先生のご協力に感謝したいと思います。

この「アフリカの角」地域においては、大変な混乱が起こっています。そして、この地域に住む人々に大変な苦痛を与えてまいりました。今何が起きているかということをも全面的に具体的にご紹介するというのは、大変難しいことです。また、その理由について語るというのも難しいと思うんですが、今日は、このような悲劇的な紛争がもう何十年にもわたって起きているんだけど、なぜそうなのか、そしてつい最近になって起こったことではないんだという話をしたいと思います。

国家の崩壊とエスニシティの台頭

まず最初に、何が起きているかという現実をお話しし、そしてなぜ起るのか、その後、今この「アフリカの角」地域で何が起きているのかをお話ししたいと思います。

かつてなかったような事態が今生じています。最も驚くべきことは何かと申しますと、脱植民地時代における国家というものが崩壊したということであり、エチオピアとソマリアというふ

たつの国がありますが、このふたつが崩壊してしまっただけでなく、もちろん国はまだあります。しかし、中央政府というものが存在しなくなってしまったということです。脱植民地時代の国家というものが植民地時代の後成立したわけですが、どうもこのモデルがうまく機能していないということです。

これら以外にも、例えばスーダンという国もあります。大変な困難をかかえています。本当にスーダンが今のような形で今後も生き残り得るのかということは疑問視されています。また、ジブチという国もあります。内戦が深刻であります。

したがって、この地域における国家というものは、もはや中央国家の体制として崩壊したか、あるいは大変な困難をかかえているという事実があります。

そして、ふたつの新しい国家が、このような国家の分離の結果として生まれました。エリトリアがひとつです。エリトリアは、事実上の独立を達成しています。独自の政治的な運動が発展しています。もうひとつは、北部ソマリアにおいて独立を宣言した地域があります。

すでに前から、こういうことは不可能だといわれていたんです。「分離というあり方はこの地域において成功しない」といわれてきました。そして、バングラデシュだけが唯一の例外だと。つまり、既存の国家から分離してできる国としては、例外的なのがバングラデシュだといわれていました。しかし、「アフリカの角」地域においては、現実に分離による国家の誕生が見られるわけです。

この背景は、かつてのソ連とアメリカという超大国がこの地域における分離を抑えようとしていた、しかしそれにもかかわらず、今日それが生じてしまったということです。

また、脱植民地時代の国家というものが崩壊したわけですが、そのかわりに何が生まれたかといいますと、新しい政治力、そしてこれに代わる代替のモデルとして、「エスニシティ」というものが中心になってきたということです。

例えばアフリカにおいては、トライバリズム（部族主義）というものが指摘されてきました。これは反動的であると。将来のモデルとはなりえないといわれてきたわけですが、しかし今日この地域においては、エスニシティー（民族性）というものが受け入れられるモデルとして台頭してまいりました。この上ではじめて新しい国家モデルができるんじゃないかといわれています。恐らく今申しあげましたような要因が現状において観察される特徴であります。

この結果として、もう少なくとも30年間大変な紛争が生じてまいりました。さまざまなイデオロギー、いろいろな正当化の理由、旗印が掲げられてまいりました。例えば国家、宗教、地域、社会階層、こういういろいろな旗が掲げられてまいりました。ナショナリズムや社会主義、宗教原理主義なども、アフリカの地域でその理由づけとして用いられてまいりました。

しかし、誰が誰と戦っているのか、そして何のために戦っているのか、よくわからないことが多いわけです。宗教戦争なのか、階級戦争なのか、その性格がはっきりしないという問題があります。

そして、今国家が崩壊してきたという中で、その中心となっていた理由がじつはエスニシティーであったのではないかということが見えてまいりました。今日このような民族集団が台頭し、そしてエスニシティーということをしてイデオロギーとして問題が展開しているということです。

では、なぜエスニシティーによって紛争が生まれるのかという問題を考えてみたいと思います。

社会科学の分野においてはいろいろな議論があります。例えばひとつの考え方で見ますと、エスニシティーというのは本来的に紛争を生むものだという事です。つまり、違った民族性を持った集団がひとつの国で共存しているとしますと、必ず紛争が生まれるという考えです。これはかなり悲観主義的な見方といわざるをえません。あるいは悲観主義的な仮説とでもいえますでしょうか。

私はその立場を取っていません。また、大げさ

ない方ではないかと思っています。つまり、世界各地を見ますと、民族集団が別に問題なく平和的に共存している地域もたくさんあるからです。

それからもうひとつの考え方は、これは私の考え方と同じなんです、エスニシティーというのは、何か過去から生まれたとか、あるいは歴史に根を持っているのではなくて、むしろ現在にその根を持っている。つまり、歴史的につくられ、そして社会的に定義づけられているのがエスニシティーだということです。

つまり、過去を見るのではなくて現在を見なければならぬということです。どのような条件の中で民族間の紛争が生まれているのか、そしてなぜ民族紛争が生じているのか、その中でなぜエスニシティーが紛争のテーマとならざるをえないのかということ、現在の文脈で考える必要があります。

したがって、何に目を向けるのかということがポイントになります。通常、民族の運動を研究しようとしたりする時に、過去を見がちです。例えば我々の民族集団は何世紀も前にこのような言葉と宗教を持って生まれた、そういうところから話を始めるわけですが、こういう立場を取りますと、状況が見えなくなってしまいます。いつ民族紛争が始まったのか、なぜ起きているのか、これを考える時に、現在を見るということが重要で

す。また、今もうひとつの論争があります。中には、エスニシティーというのは主観的な現象だという見方があります。つまり、人々の感情だとか価値観の問題であると。それがエスニシティーを生み出すんだという考え方です。つまり、自分たちの感情であるとか価値が脅威にさらされた時に、民族紛争が起こるんだということです。

しかし、このような感情をベースにした考え方というのは心理学の分野になりますので、なかなかよくわかりません。

私の考え方ですが、もちろん主観的な要因というのはあるだろうけれども、しかしむしろ目を向けなければならないのは、客観的な要因だという

ことです。つまり、実際に指摘が可能であり測定が可能な客観的な要因に目を向けなければならないということです。これらの要因というのは、権力や資源を求める競争の中に求めることができます。

そこで私は、今日のお話の中で、簡単に「アフリカの角」地域においてどのようにこの紛争が起こっているのかということを考えてみたいと思います。そして、これらの要因がいかにかかわっているのかということを目指してみたいと思います。

「エスノクラティック・ステイト」論

まず最初に、アフリカにおいて、とくにこの「アフリカの角」地域において気がつくのは、アフリカ人のアリ・マズルイという政治学者が主張しているんですけども、「エスノクラティック・ステイト（民族支配国家）」という考え方があります¹⁾。つまり、国家が、ひとつ、あるいはそれ以上の民族によって支配されているということです。このような国家においては、ひとつ、あるいはひとつ以上の民族集団が国家を支配し、他の集団は全く権力から排除されているという仕組みです。これを「エスノクラティック・ステイト」と呼んでいます。

エチオピア、スーダンに見られる状況はまさにそのとおりです。これらのふたつの「アフリカの角」地域の国においては、まさに民族支配国家という形態をとっているがゆえの紛争を経験しました。

ソマリアでは、1969年に軍事体制が成立したわけですが、その後、軍事体制は3つの氏族（クラン）の共同体の連合によって維持されました。他の氏族は排除されました。この中で大変な内戦が氏族集団の間で起こった。

また、ジブチは長期にわたってフランスの保護下にあったわけですが、ソマリアが1967年以降ジ

ブチ政府をコントロールしてきたわけです。しかし、3年前、アフールという別の民族集団が、かつては政治から排除されてきたわけですがけれども、この政権を握るようになったという動きがあります。

したがって、ある特定の時点でどういう状況になっているかということをつたってみますと、一定の民族集団によって政府が統治されていて、そしてまた別の民族集団がその統治権を握るようになった。排除された集団がゲリラ運動を起こしたり、革命を起こそうとしたりして、権力を求めようとする動きがあります。ですから、こういうふうに分析してみますと、まさに権力を求める闘争ということが特徴となっています。国家権力をめざす民族間の闘争ということです。

まさにそのとおりなんですが、しかしこれはひとつの部分を説明するにすぎません。脱植民地時代のアフリカにおける国家というのは、一定の特徴を持っています。その特徴が状況を悪化しています。

ひとつは、権力が中央に集まっているということです。そして、その中央に支配集団が存在し、この集団がすべての権力を持っているということです。他の集団は全く苦情の申し立ても認められないという構造になっています。そして、同意を得ることなく、価値観であるとか、あるいは信念、あるいは外来的な考え方というものが中央から押しつけられるということです。

政治的なこのようなシステムにおいて、異議の申し立てがあっても、これを解決することはできません。システムがないんです。また、そのような異議を伝えるルートがありません。したがって、安全弁がないために紛争が爆発的に起こるといえます。

それからもうひとつ、アフリカにおいて見られる点、またとくに「アフリカの角」地域において見られるのは、政府が権威主義的であって暴力的

1) Mazrui, Ali A., 1978, "Ethnic Tensions and Political Stratification in Uganda," in Brian M. du Toit (ed.), *Ethnicity in Modern Africa*, Westview Press.

だということです。これらの政府は、ちょっとした反対すら認めようとはしません。つまり、これらの権威主義的な国家というのは、妥協も、あるいは対話も求めないということです。したがって、暴力的になるということです。

このような政府が、一定の民族集団、あるいはその連合体によって支配されているということです。これは、遅かれ早かれ民族紛争を起こす原因となってしまいます。

資源へのアクセスと国家

では、次に考えてみたいのは、なぜ排除された集団が権力を求めようとするのかということです。権力を求めようとするのは、何か目的があるのことははずです。

その答えですが、権力というのは手段だということです。権力を手段として、安定したアクセスを資源に対して確保しようとするということです。

もちろん権力というのは、生死を左右する重要な問題です。しかし、国家が物質的、社会的な資源を支配している、その生産においても流通においてもすべてを支配している。そうなりますと、個人や集団から考えますと、自分たちの生活水準を高めたいとか、社会的な立場を変えたいというふうに考えた時に、国家権力へのアクセスがなければどうにもできないということです。

政治的な力と経済の富、そして社会的な地位には深い関係があります。このことがまさに民族支配国家の現実なわけです。特に「アフリカの角」地域においては、このような特徴というのがよりはっきりと見えています。

過去20年間、これらの地域において、マルクス主義を信奉する考え方がありました。すべて経済を中央化するということが取り組まれました。その中で、国家がすべてを支配してしまう。何らかのアクセスを得ようとするれば、権力を奪取しなければどうにもならないわけです。そのために、国家というものを対象にして権力闘争が展開されるということになります。

しかし、重要なのは、権力そのものが目的なのではなくて、権力を得ることによって何をしようとするかということです。より深く分析してみますと、この民族紛争というのは階層分化の結果であるということです。政治的な権力と民族的、社会的な階層分化には相関関係があります。言い替えますと、このふたつには結びつきがあるということです。一方を変えようと思えば、他方を変えなければ仕方がないということです。

社会的な地位、経済的、政治的な地域というのが一緒になっておりますので、それをひとつだけ変えるというのは不可能であります。これを国家が維持している。したがって、それを変えるためには、国家権力へのアクセスを得なければいけない。したがって、闘争になるわけであります。国家を再編成する。そしてアクセスを得る。これをするためには、その国家を去って別の国でもつくらなければ不可能という状況になっているわけです。

支配構造を隠すイデオロギー

「アフリカの角」におきましては、政府、支配グループが今まで隠そうとしてきたことがあります。それは、こういった相関関係、リンクがあるということでありまして。エスノクラティック国家があるということを隠そうとしていました。

そして、3つのイデオロギーが隠ぺいのために使われてきました。ひとつが、国家ナショナリズム。アフリカでは、民族や部族の違いを超えて、そして国家の統合ということを図っていかうというイデオロギーです。

そして、2番目に「アフリカの角」地域では、宗教というのも使われています。キリスト教を国家の宗教とする。そしてそれを進めていって国家をまとめていかうということがエチオピアでありました。スーダンの初期においては、イスラム教ということでありまして。今でもそうです。それをイデオロギー的なカバーとしていろいろな分断を隠そうとしております。不平等が実際はあるんですけれども、それを隠そうとしております。

3番目のイデオロギーでありますけれども、それは社会主義であります。これは「アフリカの角」では非常に力がありますけれども、それによって正当化が可能になった。すなわち、社会主義国家においては、「階層の違いがなくなれば民族の違いもなくなるんだ」というようないい方がされていたわけでありまして。社会主義によって、また同時に中央集権も正当化できる。そして、権威主義や反体制派に対する武力の使用も正当化されました。

したがって、スーダン、エチオピア、あるいはソマリアの軍事政権が革命後一夜にしてマルクス主義に転向したのも当然だと思います。非常に武力を使うような国になってしまいました。そして、あらゆる反体制に対して武力をもって抑えていくというのがこういった国々で20年間続きまして、非常に多くの命が失われてしまいました。また、経済が破綻してしまったということがありました。

これが可能になったのも、忘れてはならないんですけれども、外国の庇護があったからです。アメリカとソ連が、これら3つの国家を、時期は違え支持していたということ。そして、スーダン、エチオピア、ソマリアには、それぞれソ連、そして次にアメリカ、ソ連というふうな支持があったわけでありまして。そして国家を維持していた。そういったことがあったにせよ、国家は今では崩壊状態になっているというのが現状であります。

国家の未来像とエスニシティ

では、今の状況を見たいと思います。ソマリアの状況はご存じだと思うんですけども、いろいろと紛争が多い。これは単に国家の解体だけではありません。同時にソマリアの社会が壊れてきている。民族同士の争いだけではなく、その下の分派の間でも争いが起こっているわけでありまして。ソマリアというのはひとつの統一のある国であるというふうに言われていたんですけども、それがそれぞれの氏族のレベルで分断していき、

そして戦いを行っています。氏族の中のもうひとつ小さなレベルで分派と戦いをしているというのが内戦の状況であります。

ソマリアの社会でありますけれども、北ソマリアにはひとつの氏族が優勢なんですけど、それが独立を宣言しています。そして、ソマリアの若い人たちが、イスラム的な平等主義といったものを忘れて、女性や子どもや年配者を殺している。自分たちと同じ氏族に属する人が餓死するような状況になっている。それは、食糧援助が届かないように妨害をしているからなんです。

エチオピアは、最初は状況はもう少しいいように感じられました。軍事政権がまず崩壊しまして、その時に政治的な真空が発生しました。その政治的な真空状態のかわりに、民族的な選択肢ということが考えられているわけでありまして。民族運動の指導者たちが、エチオピアの国家をそのまま残すというだけではなく、政治的なシステムを全く新しい非常にルーズな、地方分権的で連邦主義的な民族的ユニットで構成される国家にするという、非常にリベラルな憲法を創案しようということになっております。

これはうまくいかないかもしれないんですけども、今までいろいろなことがうまくいかなかった。中央集権政治もだめだった。そして、今民族という選択肢をやってみているわけでありまして。エチオピアが成功するかどうかはまだわかりません。しかし、アフリカにはこういった前例がないということでありまして。

それに近い例としてナイジェリアがありますけれども、ナイジェリアは軍が中心となって連邦制度を実施したわけでありまして、これは地方分権のためではなくて、できるだけ中央政府に力を残そうといったタイプの政治形態でありました。

エチオピアの場合は違います。軍部、これが一晩にして消えてしまいました。そして、政治的、軍事的な力は、それぞれ民族運動、地域の運動の指導者たちが持っているわけでありまして。そして、政治的なシステムを変えていこうとしています。ですから、脱植民地時代の国家と反対極

にあります。

エチオピアでは、もうひとつ、事実上エリトリアがもう分離しているということでもあります。これは、恐らく来年の国民投票を経て正式のものになるというふうに予測されております。

スーダンです。今は内戦の最後の段階だと思えます。いろいろなことが試みられました。そして、今はイスラム原理主義を試みているということです。今までは内部の分断から目をそらすために使われてきたわけでありまして。スーダンでこの戦争が終わったとしても、今までの政府は続かないのではないかと。ジブチもそうであります。

「アフリカの角」においては、この実験が成功するかどうか、またその結末がどうなるかわかりませんが、まず民族というのが非常に大きな要因であるということでもあります。エチオピアが連邦制になって、そして民族集団で構成されるものになるか、あるいはエチオピアがばらばらになって幾つかの民族国家に分かれてしまうのか、両方考えられます。

スーダンでは、連邦政府を受け入れなければいけないんじゃないか。でなければ南部が納得しないと思えます。でなければ、南部が独立分離を求めると思えます。そういう話はずでに出ているわけでありまして。

ソマリアでは、中央集権的な政府はもう無理じゃないかと思えます。氏族がそれぞれ政治的、軍事的な力を持って、すでに流血が非常にひどい。ですから、モガディシオを中心とした中央集権的な政治というのは無理だと思えます。

そしてジブチですが、同じような解決策を求めるということになる。でなければ、まったくばらばらになってしまって、一部がソマリア、一部がエチオピアになってしまうのではないかと考えられます。ですから、好むと好まざるとにかかわらず、こういった民族という選択肢が北東アフリカにおいては非常に大きな要素、そして直面すべき要素、今も将来もそうであるということでもあります。

ほとんどの人々は、民族主義とエスニシティー

というのはあまりいい考えではないという印象があります。エスニシティーがあると、植民地時代の分断して統治するといったことを思い出させますので、昔に戻ってしまうような印象があります。そして、西側の人々も、こういった考え方は嫌だと。これは生得の考え方であるから、近代化の中で消えてしまうと。あるいはマルクス主義者は、これは虚偽の意識であるというふうに批判しております。

これは自分たちの階級の利害を忘れさせるものだということで、誰もエスニシティーはいいとは思っていないんですけども、ヨーロッパの状況を見ていまして、このエスニシティーというのは消えてしまうものでも法で統治できるものでもありません。これは政治的な力としてきちんと考慮していかなければいけないと思えます。

そして、エスニシティーについてある意見があります。アフリカでは、いろいろと開発の努力が行われているが、すべて失敗してきた。そして、一般の人々の参加があって開発プランをつくっていくということ、これができていなかったと思えます。

エスニシティーを唱える人々は、人々を参加させる、それは単に選挙に参加するということではなくて、人々自身が意志決定に自分で参加していくことが重要だといわれております。そして、プランの立案に参加する。自分たちの利害、自分たちの関心をそういった開発プランに反映させる。支配層のみの意見を反映させるのではだめだという意見です。このように、開発プランが成功するかどうかは、その参加によって左右されるわけです。

そして、次に民主化ということがあります。そして、エンパワーメント(権力の賦与)という言葉があります。人々に力を与えるためには、まずある種のユニットとアイデンティティー、そして社会的にまとまりが必要だということでもあります。そして、エスニック・グループに力を与えれば、そのエスニック・グループがひとつのレンガの役割を果たして、そしてより大きなユニット、大きな

構築物ができてくるのではないか。それをもとに国家を運営していくという考え方です。

それが成功すれば、「アフリカの角」で起こることがモデルとなって、ほかのアフリカの地域で民族紛争で苦しんでいるところのモデルになるのではないかと考えられます。

どうもありがとうございました。

質疑応答

司会 どうもありがとうございました。

予定の時間まであと16-7分あるんですけども、せっかくのご講演ですから、フロアからご質問なりご意見なりを承りたいと思います。

マルカキス教授のご講演の要旨を私が繰り返す必要は全くないと思うんですけども、北東アフリカの状況をお話しになった上で、従来のアフリカの独立期のネーション・ビルディングの挫折ということに話がおよびました。

つまり、非常に中央集権的な国家建設といったようなものは、もはやアフリカの未来を開かないのではないかと。むしろ従来マイナスイメージが抱かれていたエスニシティーといったようなものの重みというものははっきり受け止めて、そしてむしろエスニシティーを復権させることによって、いわゆる民主化というようなものにも実態を与えることができるだろうし、それからアフリカ諸国をマルチ・エスニックな国として再建していくこともできるのではないか。

エスニシティーというものの存在を認めることによって、例えば政治参加（ポリティカル・パティシペーション）も確保できるだろうし、あるいは異議申し立てといったようなことの道も開かれるだろうと。

ロバート・ダールじゃありませんけれども、政治参加とか異議申し立てというのはデモクラシーの基本でありますから、むしろエスニシティーというものを認めていくことによって、また、そうしたエスニシティーというものにかかなりの権限を

認めるといいますか、自治権を認めるといいますか、そういったことでエスニックな連邦国家というようなものを模索するのが、アフリカ諸国を再建する上で非常に大きなプラスをもたらすのではないだろうか。断言したわけではないと思うんですけども、私にはそのように受け止められました。

非常に野心的なというか、アンビシャスなお話で、またチャレンジングなお話であったかというふうにも思うんですけども、いかがでございましょうか。何かご質問、ご意見、ございませぬでしょうか。

岩崎駿介 筑波大学の岩崎です。私は専門ではありませんけれども、非常に感銘深いお話でしたので、あえて発言します。

私は筑波大学で研究している以外にNGOの活動をやってるんですけども、まさにおっしゃったことの実感といいますか、ソマリア、あるいはエチオピア、そして1番強く感ずるのは、実はカンボジアで我々いろいろやってるんですけども、国家ではなくて地方自治というような意味で、カンボジアにも非常に共通性があるということを深く感じています。

今ご承知のように自衛隊があそこに入りまして、あるいは国連が入って何をやっているかといいますと、国家と都市の再建をやっているというふうには私は考えているわけですね。それに対して、カンボジアは85%が農民なわけですけども、彼らが望んでいるのは、都市ではなく農村を、国家ではなくローカル・イニシアチブといいますか、地方自治をとということがありまして、同じ文脈の中で国家のあり方が本当に問われているというのを強く感じています。

私自身、今年の6月、ブラジルで開かれました「環境と開発に関する国連会議」に行ったんですけども、そこでも現代の国家の枠組みが諸悪の根源であるといいますか、そういう状況をつくり出しているということも深く感じました。

先生のお話ですと、アメリカとソ連が結局それを支えてきたと。しかしながら、そのふたつの

弱体化によって国家のベールが少しずつ剥がされているのではないかというようにも推測しました。

とくに質問ということではないんですけども、非常に示唆的で、私自身まだまだちょっと全体をとらえきれていないので、ご指摘で整理してみたいことはいろいろ感じましたけれども、私の意見を述べさせていただきます。

司会 ありがとうございます。

川端正久 川端です。

先生の話、実に明確であったと思うんですけども、1、2点だけ質問させていただきたいと思えます。

エスニシティー中心の連邦ということでありませけれども、実際アフリカ全体で、連邦を構成している国は現在ふたつにしかすぎない。アフリカの政治形態としては、連邦というのは今のところ極めて例外的なわけですね。

先生の場合は、そういう国家の制度として考えられているのか、実質の内容としてそういうものを構想されているのか。たぶん「アフリカの角」の場合は、実際に連邦国家を形成するというのはなかなか困難だろうと思うんです。そのへん、先生のこれからの見通しを示していただければありがたいというふうに思います。それが第1点。

ふたつめは、国家が崩壊しているということはまさにそのとおりで、ナイジェリアの場合もそうだと思うんですけども、先生はナイジェリアまで説明されたと思うんですけども、今のナイジェリアの状態も同じような状態とお考えでしょうか。これがふたつめであります。

みっつめは、今ソマリアの窮状に対して国際社会がやっと反応を示しはじめた。日本の反応はきわめて遅いんですけども、今ソマリアに対して何をなすべきなのか。先生のコメントをいただければありがたいと思います。

司会 どうぞ、マルカキス先生。

マルカキス 最後の質問ですけども、日本が何ができるかということについて。

国際的な努力が現在なされています。まず、ソ

マリアにおいて、エチオピア、ECからのグループが、このような民族紛争といったものができるだけ抑えて、新しい憲法を創案しようということに手助けをしているわけです。スーダンでもそうであります。多くの国々が今独自で、あるいは他の国と協力することによって、第1のステップとして、まず武力闘争をやめさせるということをしています。日本は、そういった面で非常にいい地位にあると思います。それにはふたつの理由があります。

まずひとつめは、このような地域に介入したことが過去ないということです。アメリカにしても西欧諸国にしても、どっちかに味方してるんじゃないかというような疑いをかけられる余地があるわけなんです。日本の場合は過去がクリーンだといいますが、過去の経緯がないので、どっちかに味方しているというふうに疑われることはありません。

それからふたつめは、経済的な援助がしやすいということです。平和的な構築を手助けする資源があります。

どのように国家を構築していくか、連邦を構築していくかということなんですが、非常に地方分権化が進んだ連邦ということではなくて、現在では人々を殺すことによってのみ中央政権を確立しているわけですから、そういったことで国をなくしてはいけないと思います。

司会 ありがとうございます。それでは、もうお一方だけ、ご意見ないしはご質問をいただきたいと思えます。

原 幸雄 私、東京から来ました青年海外協力隊のOBで、原と申します。

このような研究を専門的にやっておりませんので、全くアマチュアの立場から考えて、プロフェッサーの研究などを通して、ECとかユーゴの問題、ロシアの異民族の問題等の理解においてひとつの助けとなるような指針など、もしございましたらコメントをしていただきたいと思います。

司会 大分守備範囲を離れたご要望ですけど

も、いかがでございますか。ECとか旧ソ連などの民族問題との関係で、どういうことがいえるかというご質問かと思えますけれども。

マルカキス 私は専門家ではありません。むしろ私自身がまだ学究の徒でございます。

その他の地域の民族紛争ということで非常に難しいんですけども、人民そのものがやはり何かの民族的な境界といったものを意識している。つまり、政治形態がどうであっても、やはり民族的な原則といったものがこれからも強く支配してくるんじゃないかと思えます。それによって問題を解決することはできると思えます。

司会 ありがとうございます。まだ5分ございますが、どなたか。

清水安高 私、清水と申します。私も青年海外協力隊でエチオピアのほうに行っておりました。

先生のお話で、エスニシティーのところでは社会的、経済的、政治的などではエスニシティーは衝突の原因にはならないというようなこと。僕、ちょっと聞き違えかもしれないですけども、そのように聞きましたんですが、どうなんでしょうか。

司会 大変失礼ですが、それは聞き違えだと思えますけれども。

エスニシティーそれ自体が紛争の原因というのではなくて、むしろエスニック・グループ同士の紛争というものが起こってくる理由は何かということを考える時に、それはもちろん歴史的な要因もあるでしょうけれども、政治的、経済的な諸条件というものが作用して、それでエスニックな紛争が起こってくるという趣旨のお話だったと思えます。

それでよろしいですか、マルカキス教授。

マルカキス 今小田先生がおっしゃったとおりです。

文化的な要素としてのエスニシティーというものが衝突の原因になるということではありません。ただ単に社会環境が違うだとか、言葉が違うだとか、そういったことで人々は紛争をするのではないわけです。物質的、あるいは社会的な資源に手

を届かすために、そういったことから衝突が行われてくるんだということを言いたかったわけです。

「アフリカの角」地域においては、社会的あるいは経済的な資本が不平等に分配されている。そして、権力の中にいない人々は全くそれに手をかけることはできないわけですから、こういった不均衡な分配といったことが人々の紛争の原因になるんだと。そういった資源を取るために、人々は戦っているんだということを言ったわけです。

とくに「アフリカの角」地域においては、学校を建てるにしても、国家しかできない。家を建てるにしても、何か国家的なつながりがなければできないわけですから、そういった意味で民族紛争の原因として幾つかの要因を挙げたわけです。

サファラ・ギザウ 私、サファラと申します。東京のエチオピア大使館に勤めております。まず最初に、日本ナイル・エチオピア学会に対して、このような機会を設けていただきまして、「アフリカの角」の地域はもちろん日本からずいぶん遠いわけなんですけれども、こういった地域に焦点を当てていただいたということに心から御礼を申し上げたいと思えます。

日本とアフリカの交流も、それほど今活発というわけではないと思えます。ですから、このようなフォーラムを開催することによって、日本の人々がアフリカについての理解を深めていただけるということで、非常にうれしく思っています。

また、マルカキス教授に対しても御礼の言葉を申し上げたいと思えます。非常に明確な形で、実際「アフリカの角」がどういう状況にあるのか、そしてその衝突の原因とは何なのかということの説明していただきました。「民族」という選択肢を提示なさいましたが、やはりこれのみが恐らく現在我々が試す価値のある選択肢じゃないかと思えます。すべてその他のことは、試されてうまくいかなかったわけです。

将来についても、これからよく考えていかなければいけません。もちろんこの「民族」という選択肢を追及していく理由といったものは、非

常に大きなものであります。エチオピアでも、80以上の言葉が話されているわけですから、このような状況でどのような問題が起こってくるのかということも推察していただけたらと思うんです。

とにかく、いろんなこと、すべてのことをやってみて。そして現在、この連邦制度というのを政府が試しているわけです。武力闘争に関与しないような形で、すべての民族が参加した形で今我々も行なっていますので、将来的にどのような形になってくるかということを目を注ぎたいと思います。

それから、エチオピアに関して、マルカキス先生が大学でかなり長い間エチオピアの講義をなさっておられる。そして、エチオピアの環境を非常によく承知なさっているということ、私自身も非常にうれしく思っています。実際にマルカキス先生の生徒の幾人かの方々が現在活躍しているということで、御礼の言葉で締めたいと思います。ありがとうございました。

司会 それでは、時間もまいりましたので、これでマルカキス教授のご講演と質疑応答を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。